

第二外国語としての中国語に関する一考察
—北見工業大学を事例として—

鈴木衛*

A Case Study on Learning Chinese as a Second Foreign Language at
Kitami Institute of Technology

Suzuki Mamoru

Abstract

In this paper, the author conducted a questionnaire survey of two Chinese language classes at Kitami Institute of Technology regarding the reasons for enrolling in Chinese courses and the relationship to joining study abroad programs. According to the results, most of the students were mainly interested in earning credits, and only a few enrolled in the classes for other reasons. From the perspective of the internationalization of the university, it is necessary to establish a system in which taking a second foreign language is not merely a matter of earning credits, but is also useful for studying abroad and finding a job. In addition, developing diverse learning opportunities, especially in light of the merger of the three universities in April 2022, is important.

1. はじめに

今日、多くの大学では第二外国語の履修の選択肢があり、様々な言語を習得できる機会が設けられている。既に、中学校や高等学校において第二外国語を履修している学生もおり、早い段階から第二外国語を学べる機会も存在する。その背景の一つに、今日のグローバル社会において、英語に加えて他の言語を身につけることにより、様々な価値を創出し、活躍の場も広がっていくと考えられている。これまでも多くの研究者が第二外国語に関する研究を異なる角度から行っている。

* 北見工業大学講師 Lecturer, Kitami Institute of Technology

本稿では、筆者が所属する北見工業大学（以下、「本学」という）を事例として、学内の留学者数の推移と第二外国語の履修についての現状把握を行い、問題点を検証する。また、法人の経営統合により他大学の第二外国語の状況を鑑み、今後の多様な学びの場の整備についても言及することにする。さらに、筆者が担当するクラスで行った中国語の履修理由と海外留学等への関連についてのアンケート結果を分析し、今後の第二外国語としての中国語学習や海外留学を支援する対策を講じることにする。第二外国語としての中国語を様々方面から捉え、多角的に考察することを本稿の目的とする。

2. 中国圏への留学について

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が実施した「2020（令和2）年度日本人学生留学状況調査」によると、日本人学生の海外留学者数は1,487人で、前年度の107,346人から大幅な減少になっている。これは、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響により、受け入れ側と送り側双方に留学できる状況になかったことが挙げられる。これまでは、中国を留学先に選んでいた日本人留学生は、2016年度4,091人、2017年度5,000人、2018年度7,980人、2019年度6,184人と推移している。また、国別では中国が7割近くを占めている。この背景には、中国政府の多様な留学生獲得政策が挙げられる。中でも教育予算が日本の比ではなく、中国教育部が公表した資料によると、2019年は39億2,000万元（約760億円）で前年比18.1%の増加になっている。中国国内では、様々な意見があるものの、奨学金の給付など、留学に引き付ける要因は多々あるようである。Jiani, M. A. (2017)の留学先を中国に選んだ研究では、中国の立ち位置や資金面での支援が大きく影響していると指摘している。このように、現在の中国は世界の主要な経済国であるとともに、教育面でも人材が集まる国に変化を遂げている。

本学の場合、国際交流協定締結校数は34大学である（2022年8月現在）。その内、中国語圏の大学については、中国が6大学、台湾が2大学の計8大学ある。これまでの本学における留学生数の推移については図1の通りである。平成24（2012）年と平成25（2013）年度をピークに全体の留学生数が減少し、その後増減を繰り返しながら現在に至っている。協定締結校からの特別聴講生に関しては、20人前後で推移してきたが、2019年12月初旬に中国の武漢市で第一例が報告された新型コロナウイルス感染症（COVID-19）により渡航の制限が大きく響き、一気に減少している。これ

までは、2割程度を協定校からの特別聴講生に頼っていた部分が非常に強かったため、数字の上でも顕著に表れている。

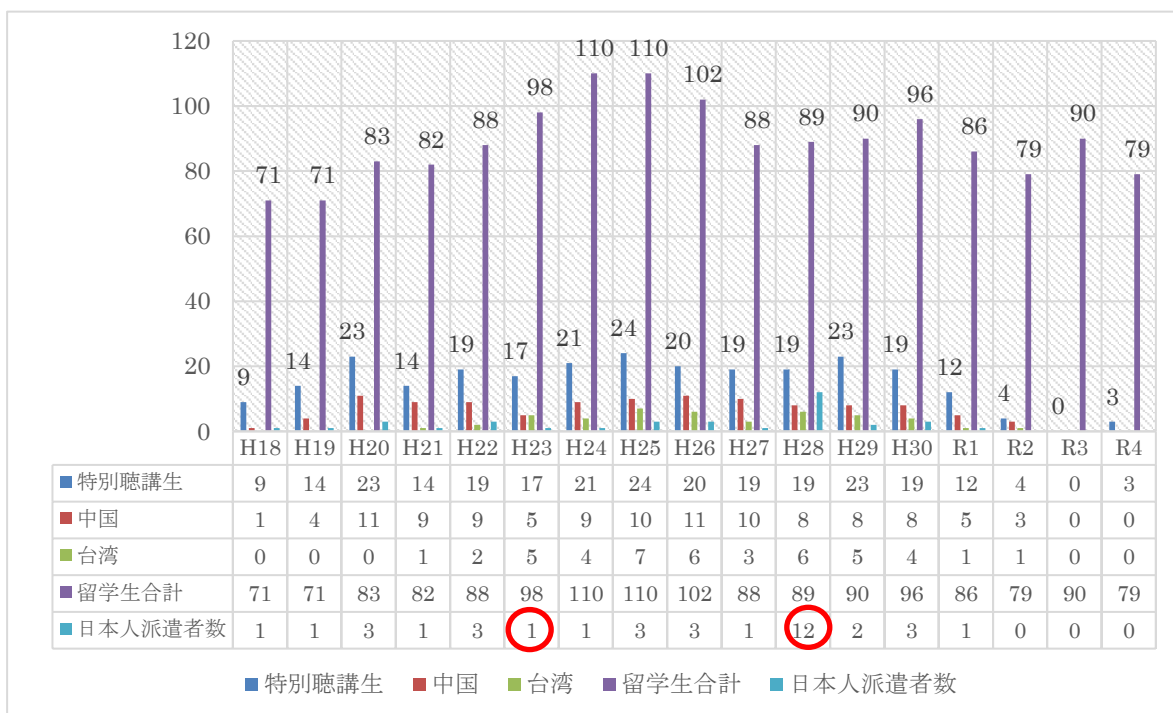


図1「北見工業大学の留学生数の推移」

出所：「派遣・受入留学生数（統計）」北見工業大学国際交流センターを元に筆者作成。

備考：○は中国派遣の人数である。H23 東北電力大学及び H28 ハルビン工程大学に各1人派遣。各年度5月1日現在の在籍者数。

日本人の海外留学については、平成28（2016）年度に10人を超える日本人学生が留学しているものの、通常1人から3人程度で推移している。中国語圏に関しては、協定校からの受け入れ数と日本人学生の派遣数との間には大きな隔たりがある。中国語圏の協定校は前述した通り8大学あるが、過去16年において、日本人派遣学生は2名のみであり、他方、中国語圏の学生受け入れは、156人で1対78人という極端にアンバランスな減少が起きている。本学では大規模な留学に関する調査は行っていないため、その理由について断定できないが、日本全体で海外留学が低迷していることもあり、一大学の問題ではなく、一国の問題であるようにも思われる。

本学独自の支援としては、日本人の海外留学用に「学術振興・国際交流基金」の月3万円の奨学金がある。また、学生後援会より、国内分を除くエコノミークラス割引航空運賃又は最低見積額の60%を、片道15万円を限度として予算の範囲内で支給する制度もある。これまでの留学経験者の報告から

は、このような奨学金や助成金があったため経済負担が減ったとの報告がある。今後、国際交流センターとしては意欲ある学生の留学を後押しできるよう、上述の支援に加え新たな支援制度を検討中である。なお、留学とは別に、語学研修も実施しており、中国語圏をはじめ英語圏、ドイツ語圏の研修も設けている。

3. 第二外国語の履修について

冒頭でも述べた通り、第二外国語はそれぞれの機関で履修の選択が異なっている。今日のグローバル社会において、英語に加えて他の言語を身につけることは重要であり、学習の意義は高いと考える。本学においては第二外国語としてドイツ語と中国語を履修することが可能である。また、北海道国立大学機構の他大学においてもそれぞれ第二外国語を開講している。本章では、本学及び同機構の他大学である小樽商科大学と帯広畜産大学の状況を検証し、今後どのような面で連携が可能かについてみていくことにする。

3-1. 北見工業大学における第二外国語の取り扱いと履修者状況について

本学の基本目標「4. 国際的視野を踏まえた教育研究，学生・教職員の国際化を推進¹⁾」には、国際化に対応した人材育成と交流促進を図るとあり、そのために、語学力の向上が必要であると明記されている。また、2022年4月1日に創設された「国立大学法人北海道国立大学機構」の経営方針においても、グローバル化の項目として、「国や地域の枠を超えた様々な機関との連携・協同により、国際通用力を持つ人材育成と国際性豊かな都市環境創出に取り組む。」と掲げられている。前者は語学学習の重要性を明記しているが、後者については語学力についての言及はないものの、これらの取り組みには語学力の向上は必要であり、本学の基本目標と同様に法人の方針も同一のものであることがわかる。この語学力とは、単なる英語力だけではなく、第二外国語、更には日本語力も含まれる。本稿では、第二外国語に焦点をあて、本学の取り扱いについてみていきたいと思う。

本学においては、2020年度入学者までは、ドイツ語又は中国語のいずれか

¹⁾ 「多くの国から留学生を受け入れるとともに、国際化に対応できる素養とコミュニケーション能力を持った学生を育てる。また、国際的視野を踏まえて教育研究を活性化するため、国際協定校を拡大しながら学生・研究者の交流を図るとともに、様々なレベルでの国際共同研究を推奨・推進する。これらの目標を達成するためには、学生・教職員の語学能力の向上が必要であり、海外研修の機会を拡大させる。さらに、留学生や研究者などの多くの外国人と地域との交流の機会を増やすなど、地域の国際化にも貢献する。」

第二外国語としての中国語に関する一考察—北見工業大学を事例として—

一つの履修が選択科目IAで必須とされていたが（表1参照）、2021年度入学者以降は選択科目ICに変更され、且つ必ずしも第二外国語を履修しなくても卒業できるように変更が行われている（表2参照）。しかしながら、入学時のガイダンスで配布された「第二外国語と選択ICの履修について」のガイダンス資料には、「1年次より単位を修得することにより、2年次以降の履修に余裕ができます。」と理由（メリット）の記載があり、反対に履修例8²のデメリットとして、「例8の場合、2年次後期の履修科目の増加につながります。例8で万一不合格になった場合、3年次での履修科目の負担につながります。」との記載もある。この資料からは実質第二外国語の履修を推奨していることがわかる。

表1 「選択科目IA」（2020年度以前入学者）

授業科目	授業方法	単位	開講時期及び単位数		備考
			1年		
			前	後	
ドイツ語	演習	2	2		2単位修得
中国語	演習	2	2		

出所：『学生便覧 令和2年度（2020）』「別表I（第40条、第42条関係）」

表2 「選択科目IC」（2021年度以降入学者）

授業科目	授業方法	単位	開講時期及び単位数				備考
			1年		2年		
			前	後	前	後	
ドイツ語Ⅰ	演習	1	1			4単位以上修得	
ドイツ語Ⅱ	演習	1		1			
中国語Ⅰ	演習	1	1				
中国語Ⅱ	演習	1		1			
体育実技Ⅱ	実技	1		1			
科学技術論	演習	2			2		
健康とスポーツ科学	演習	2			2		
現代言語学	演習	2			2		
産業経済論	演習	2			2		
国際関係論	演習	2			2		
ヨーロッパ文化	演習	2			2		
芸術と社会	演習	2			2		
文系作品鑑賞	演習	2			2		
美学・芸術学	演習	2			2		
身体運動の科学	演習	2			2		
教育学	演習	2			2		

出所：『学生便覧 令和3年度（2021）』「別表I（第40条、第42条関係）」

² 1年次で第二外国語を履修せず、2年次後期に人文社会系科目（2科目）あるいは人文社会系科目（1科目）+1年次の諸科目（前期・後期で計2単位）を履修する方法。

第二外国語を履修するには、履修希望アンケートに回答し、中国語又はドイツ語にクラス分けされ、履修する形となっている。表3は、「第二外国語履修希望アンケート」の結果である。これによると、両年度共に約97%の新入生がアンケートに回答しており、語学別履修者数は、ドイツ語は2021年度150人、2022年度151人であったのに対し、中国語は2021年度247人、2022年度252人であった。一年生で中国語を履修できずドイツ語を履修した学生は2021年度74人、2022年度は77人存在した。その内、2021年度は8人、2022年度は4人がドイツ語を履修していなかったことも明らかになった（表4参照）。この二年間は、ドイツ語と中国語の履修希望者数の差が約1.6~1.7倍であることがわかる（表3、表4参照）。

表3 第二外国語履修希望アンケート

	2021年度		2022年度	
	人	%	人	%
新入生数	411	100.0	414	100.0
アンケート回答者	398	96.8	403	97.3
ドイツ語希望者	150	37.7	151	37.5
内留学希望者数	29	19.3	27	17.9
中国語希望者	247	62.1	252	62.5
内留学希望者数	48	19.4	48	19.0

出所：各年度アンケート結果を元に筆者作成。

表4 第二外国語別履修者数の内訳

年度	科目名	1年	2年	3年	4年	退学・除籍	合計
2021	ドイツ語1	217	20	8	0	11	256
2022	ドイツ語1	224	11	6	3	0	244
2021	ドイツ語2	190	15	7	0	7	219
2022	ドイツ語2	120	3	2	1	0	126
2021	中国語1	173	10	5	0	7	195
2022	中国語1	175	4	5	2	0	186
2021	中国語2	134	5	4	0	4	147
2022	中国語2	68	0	4	0	0	72

備考：2022年度ドイツ語2、中国語2は後期履修登録前の数値。

前述の通り、各学期ドイツ語5クラス、中国語4クラス構成のため、アンケートに回答した学生を平均して9クラスに分けている。そのため、本来中国語を希望した学生がドイツ語に振り分けられ、そのまま履修をしている状

況にある。実際、二年間で当初中国語を履修した 12 人の学生が第二外国語の履修を断念している結果もあり、学びたい語学を学べず、モチベーションの低下にもつながっている可能性も否定できない。現状を踏まえた希望通りのクラスを提供するには、ドイツ語 3 クラス (2 減)、中国語 5 クラス (1 増) が必要なことになる。今後、現状を反映したクラスについて検討する必要があると考える。この他の問題としては、アンケートに回答しなかった新入生は履修ができず、結果二年次で履修を行っている学生も存在する。当該学生については、アンケートを介さなくても履修できるため、不回答者で本来履修を希望する学生に対しては配慮も必要であると考え。筆者に関しては、昨年度と今年度、アンケート未回答者 2 人から履修の依頼があったものの、第二外国語の履修方針に従い、断っている経緯がある。他のドイツ語担当教員も同様であり、今後議論が必要である。

3-2. 北海道国立大学機構三大学における第二外国語の履修について

2022 年 4 月 1 日の法人の一本化により、今後三大学において様々な分野での連携が期待される。第二外国語の履修についても早晚そのような余地があると考えている。三大学の現在の開講状況は、表 5 の通りである。各大学のシラバスより検索した結果、本学は、ドイツ語と中国語の 2 科目、帯広畜産大学は、ドイツ語とスペイン語の 2 科目、小樽商科大学はドイツ語、中国語、スペイン語、フランス語、ロシア語、韓国語の 6 科目の開講が確認できた。また、単位の互換については、本学以外の 2 大学においては、単位認定制度を有していた (表 6 参照)。

語学学習の体制については、小樽商科大学の場合、1991 年 10 月に言語センターを設立し、現在まで外国語教育を担ってきている。当時、大学設置基準の緩和をうけ、他大学の多くが一般教育や語学を大幅に削減する中、小樽商科大学は逆に外国語教育の拡充を打ち出している。1991 年 10 月、言語センターは省令施設として誕生し、現在、「英、独、仏、中、西、露、韓」の 7 外国語を教授している。また、留学生向けの日本語教育の他、外国語教授法の研究、海外留学に向けた学習支援、ICT 教室やライブラリーの整備にも努め、最近では online 学習と対面授業を融合した Blended learning にも取り組み、21 世紀の国際社会に対応した外国語教育を目指している³と明記している。本学の場合、1994 年に留学生相談室が設置され、2004 年に国際交流センターが設置されている。主に、留学生の受け入れを行い、他方日本人

³ 小樽商科大学言語センター「言語センターへようこそ」

学生の派遣にも取り組んでいる。しかしながら、小樽商科大学のような語学センターの役割は果たしておらず、語学教育は旧共通講座、現基礎教育系が担当している。帯広畜産大学は、国際交流については、国際・地域連携課国際連携係、留学生支援については学生支援課留学生係が担当している。留学生派遣前の事前学習について2022年9月6日に電話にて問い合わせを行ったところ、担当者より「実施無し」との回答があった。派遣に関しては、基準を設けているため、その基準に達した学生は申し込みができるため、あえて語学研修の場を設けてはいないとのことであった。

こうしてみると、三大学では小樽商科大学が語学の面では非常に豊富な科目数を有していることがわかった。また、単位交換については、本学以外の2大学は既に導入済みであり、今後本学または法人で統一した取り組みの必要性も指摘できる。法人の経営方針でもある語学力の向上については、学生の目標値はあるものの、教員側で目標値を設定し、取り組む努力も必要である。それには、国際交流センター単独では非常に困難なため、基礎教育系との連携、他大学との連携を模索しながら、留学を後押しできる体制作りも喫緊の課題である。

表5 大学別第二外国語クラス数

	ドイツ語		中国語		スペイン語		フランス語		ロシア語		韓国語	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
北見工業大学	5	5	4	4	/	/	/	/	/	/	/	/
帯広畜産大学	6	5	/	/	4	3	/	/	/	/	/	/
小樽商科大学	5	5	11	11	5	5	5	5	4	2	5	5

出所：各大学シラバスより検索し、筆者作成。備考：斜線は未開講科目。

表6 大学別第二外国語の単位認定制度の有無

	ドイツ語	中国語	スペイン語	フランス語	ロシア語	韓国語
北見工業大学	×	×	/	/	/	/
帯広畜産大学	○	/	○	/	/	/
小樽商科大学	○	○	○	○	○	○

出所：三大学のホームページを参考に筆者作成。

4 中国語履修者のアンケート結果と課題について

2022年度前期終了時点で、筆者が担当している第二外国語中国語1の二つのクラス(C1、C3)を対象に、中国語の学習動機と満足度、対中国意識と海外留学についてFormsによるWeb調査を実施した。実施期間は2022年7

月 20 日から 7 月 27 日までとした。非常勤講師担当のクラスについては、使用教材や学習方法が異なるため、今回は調査対象から除外した。回答者数は、C1 が 48 人中 41 人 (85.4%)、C3 が 44 人中 35 人 (79.5%) の計 76 人 (82.6%) で、設問数は全 19 問であった。以下、各設問の結果である。

設問 1 の「大学入学前の中国語の学習経験について」は、76 人中、61 人 (80%) が学習歴なし、13 人 (17%) が 1 年未満、2 人 (3%) が 1 年以上 2 年未満であった (図 2 参照)。設問 2 の「中国語を履修した最大の理由について」は、59 人 (78%) が単位取得、次いで 12 人 (16%) が中国に関心があるため、就職に優位だからとその他 (何かと知っている と便利だから。好きなゲーム会社が中国の会社だから。) が各 2 人 (2%)、旅行のために 1 人 (1%) であった。留学のためを選択した学生はいなかった (図 3 参照)。設問 3 「中国語の目指すべきレベルについて」は、55 人 (72%) が簡単な日常会話ができるようになりたい。次いで、旅行で使えるようになりたいが 15 人 (20%)、ビジネスで使えるようになりたいが 4 人 (5%)、その他 (ある程度読み書きができる。単位が取ればよい) が 2 人 (3%) であった (図 4 参照)。

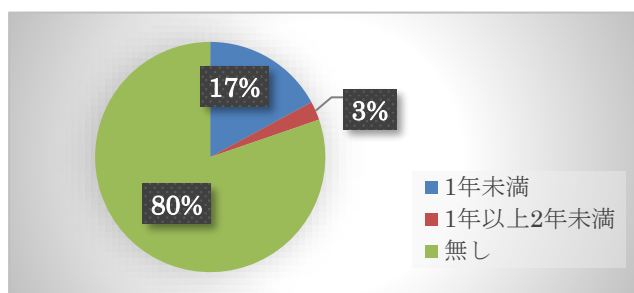


図 2 「大学入学前の中国語の学習経験について」 (設問 1)

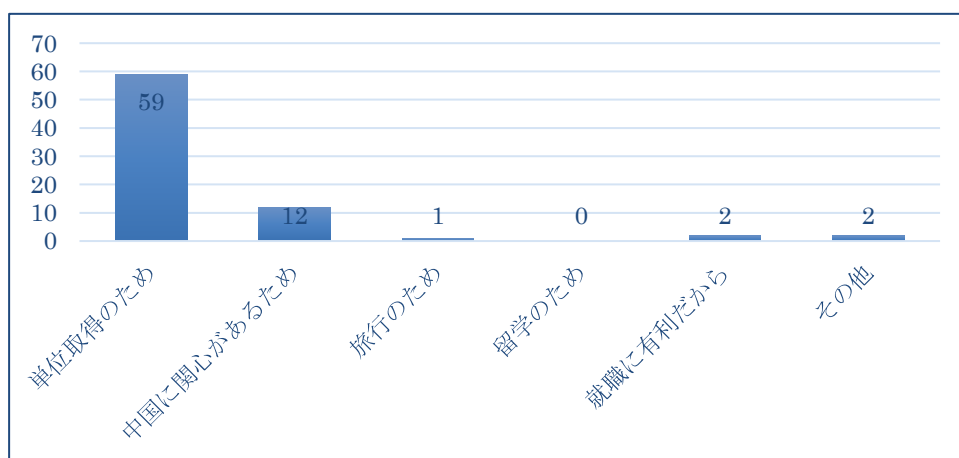


図 3 「中国語を履修した最大の理由について」 (設問 2)

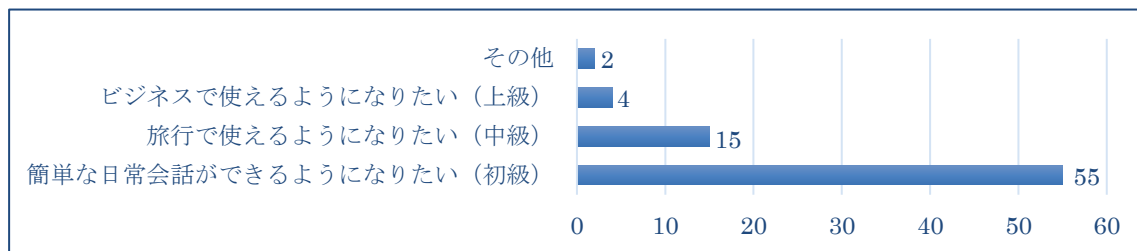


図4 「中国語の目指すべきレベルについて」(設問3)

設問4「授業の難易度について」は、非常に難しいとやや難しいを合わせると57人(75%)で、やや簡単が19人(25%)であった(図5参照)。設問5「発音の正確さについて」は、ある程度正確に発音できるが17人(22%)、あまり正確に発音できないが59人(78%)であった(図6参照)。設問6「今後の発音の取り組みについて」強化して取り組みたいとある程度強化して取り組みたいが66人(86%)で、あまり強化して取り組みたくないと強化して取り組みたくないが10人(13%)であった(図7参照)。設問7「文法の理解度について」では、全く問題ないとほぼ問題ないが35人(46%)、やや問題ありと非常に問題ありが41人(54%)であった(図8参照)。設問8「文法の理解度強化について」は、強化して取り組みたいとある程度強化して取り組みたいが69人(91%)、あまり強化して取り組みたくないと強化して取り組みたくないが7人(9%)であった(図9参照)。設問5と設問7を比較したのが図10である。これによると、共に問題ありと答えた数が問題ないより多く、発音については8割近くの学生が問題ありと認識している。また、今後の取り組みについて、設問6と設問8を比較したのが図11である。発音と文法を共に強化したいと思っている学生が9割近くに上っている。

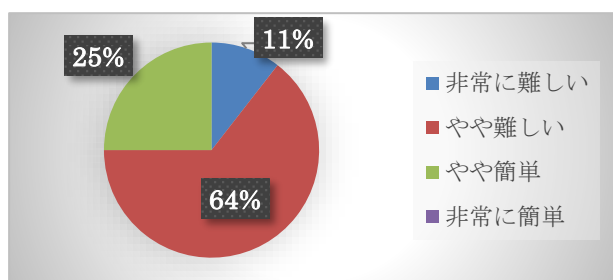


図5 「授業の難易度について」(設問4)

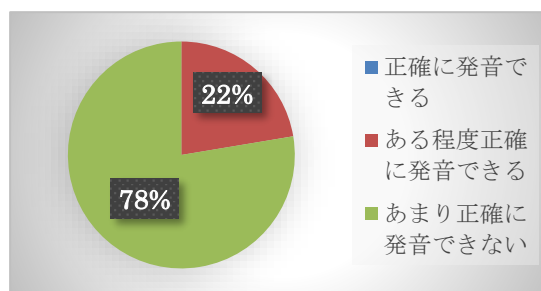


図6 「発音の正確さについて」(設問5)

第二外国語としての中国語に関する一考察—北見工業大学を事例として—

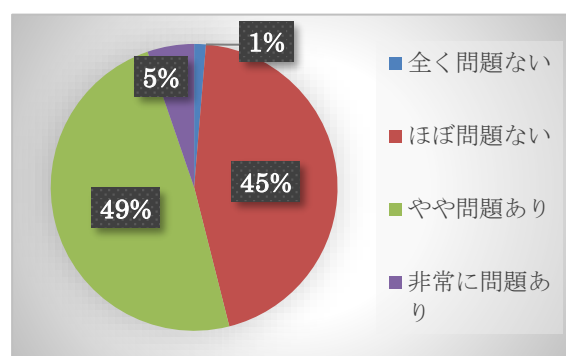
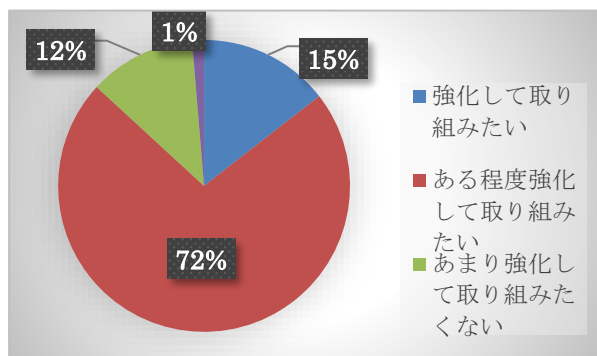


図 7「今後の発音の取り組みについて」(設問 6) 図 8「文法の理解度について」(設問 7)

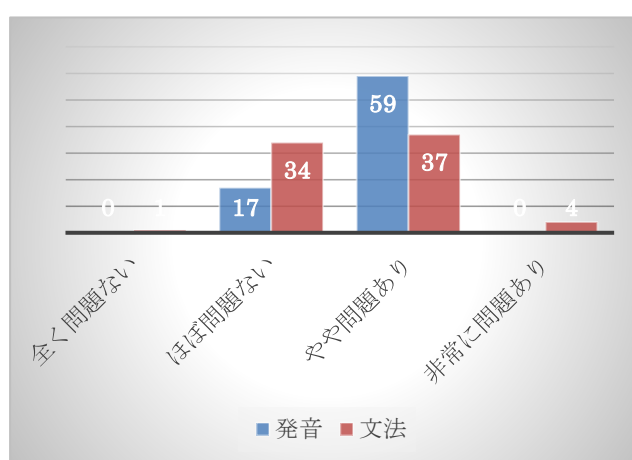
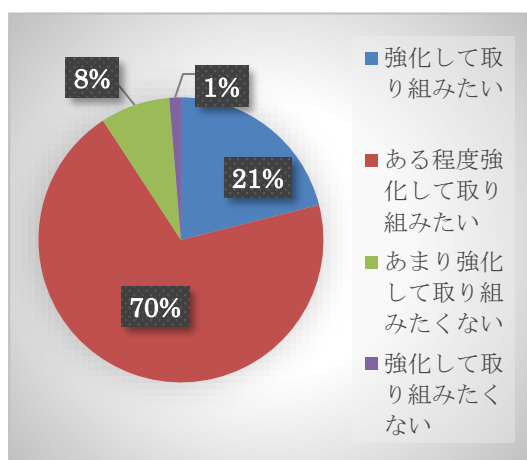


図 9「文法の理解度強化について」(設問 8)

図 10「発音の正確さについて」(設問 5)

「文法の理解度について」(設問 7)の比較

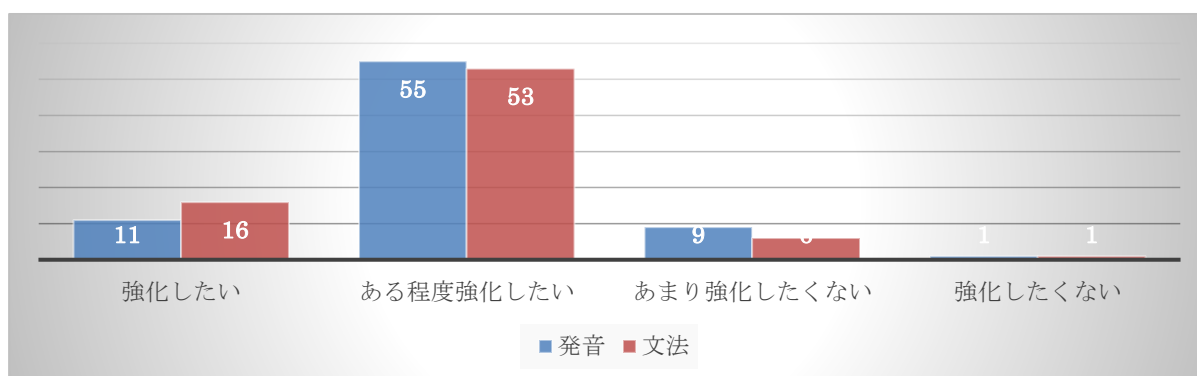


図 11「今後の発音の取り組みについて」(設問 6)と「文法の理解度強化について」(設問 8)の比較

設問 9「ハイブリッド型授業について」は、非常に満足が 41 人 (54%)、やや満足が 29 人 (38%)、やや不満と非常に不満が 6 人 (8%) であった (図 12 参照)。設問 10「授業に最も期待することについて」は、会話の向上が 23

人（30%）、読解力の向上が 20 人（26%）、筆記力の向上が 7 人（9%）、聴力の向上が 6 人（8%）、4 技能すべて向上が 20 人（26%）であった（図 13 参照）。設問 11「学習前と学習後の興味の変化について」は、興味なしから興味なしが 13 人（17%）、興味なしから興味ありが 39 人（51%）、興味ありから興味ありが 24 人（32%）であった（図 14 参照）。

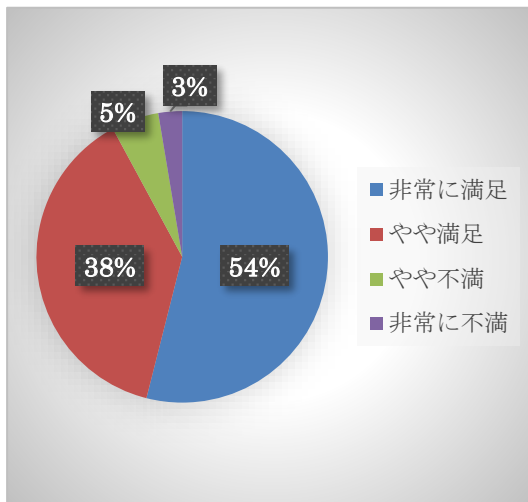


図 12 「ハイブリッド型授業について」
(設問 9)

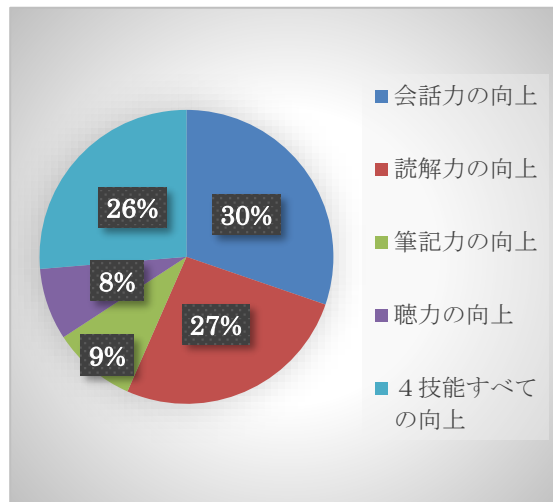


図 13 「授業に最も期待することについて」
(設問 10)

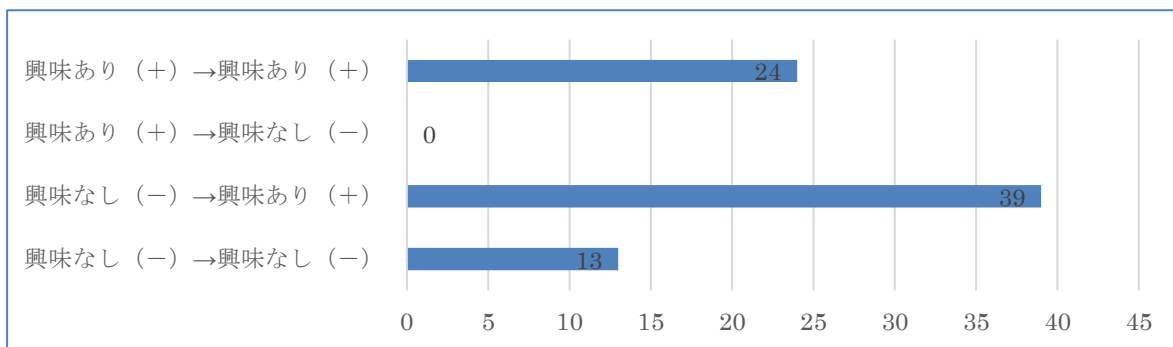


図 14 「学習前と学習後の興味の変化について」(設問 11)

設問 12「中国に対する印象について」は、非常に良い、ある程度良いが 54 人（71%）、あまり良くないが 22 人（29%）であった（図 15 参照）。設問 13「安全保障上、中国に対する脅威について」は、非常に脅威を感じる、ある程度脅威を感じるが 59 人（78%）、あまり脅威をかんじない、全く脅威を感じないが 17 人（22%）であった（図 16 参照）。設問 14「中国留学・研修に参加したいか」は、非常に参加したい、やや参加したいが 17 人（22%）、あまり参加したくない、全く参加したくないが 59 人（78%）であった（図 17

参照)。設問 15「台湾留学・研修に参加したいか」は、非常に参加したい、やや参加したいが 26 人 (34%)、あまり参加したくない、全く参加したくないが 50 人 (66%) であった (図 17 参照)。設問 16「中国語を話せる留学生と交流したいか」については、非常に交流したい、やや交流したいが 47 人 (86%)、あまり交流したくない、全く交流したくないが 29 人 (14%) であった (図 18 参照)。

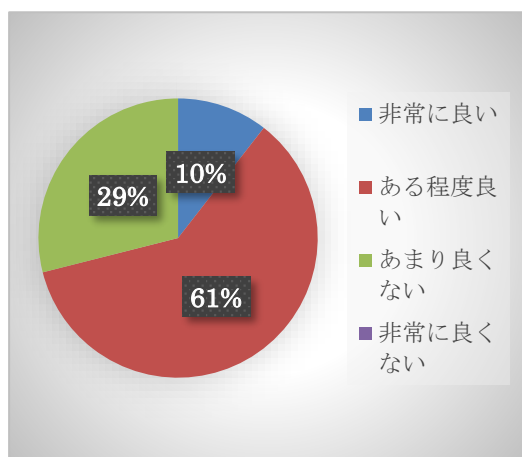


図 15 「中国に対する印象について」(設問 12)

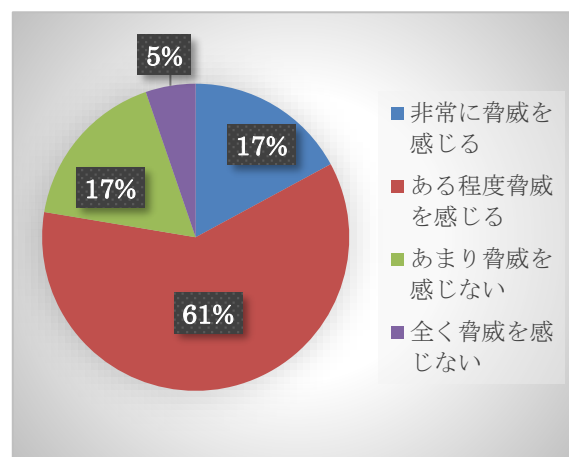


図 16 「安全保障上、中国に対する脅威について」(設問 13)

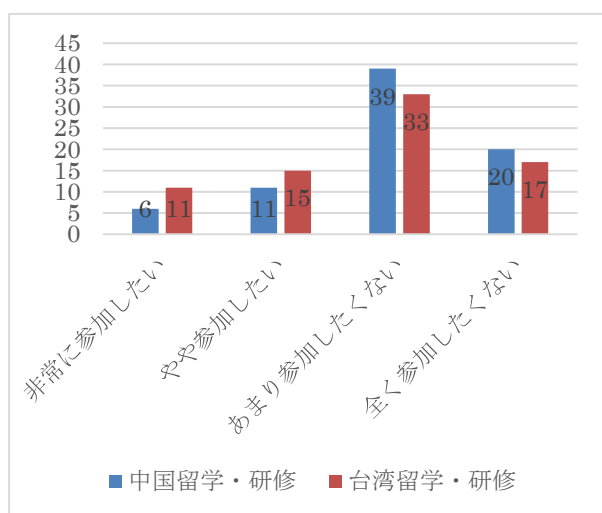


図 17 「中国留学・研修に参加したいか」(設問 14)と「台湾留学・研修に参加したいか」(設問 15)の比較

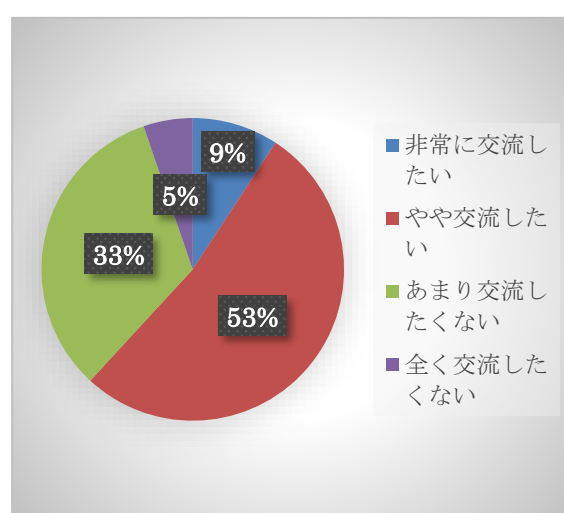


図 18 「中国語を話せる留学生と交流したいか」(設問 16)

設問 17「海外渡航の有無」については、17 人 (22%) があり、59 人 (78%) が無しであった (図 19 参照)。設問 18「北見工大の留学支援制度を知ってい

るか」については、26人(34%)が知っている、50人(66%)が知らないであった(図20参照)。設問19「北見工大の学生の海外留学を増やすには、どのような対策を講じればよいか」については自由記載形式でおこなった。76人(100%)から回答があった。回答を6つに大きく分けた結果、「①周知」については39人、「②制度」については16人、「③留学生との交流の場の創設」は8人、「④留学先の増加」と「⑤その他」が各5人、「⑥特になし・わからない」が3人であった(図21参照)。「①周知」については、「海外留学についてメリットやデメリットを説明してほしい」や、「海外の魅力を発信してほしい」といった意見が多かった。「②制度」については、費用負担の軽減や単位互換の充実を希望する学生が見受けられた。「③留学生との交流の場の創設」については、交流を通じて海外に興味を持ってもらい、留学を後押しする場を求めるものが大多数であった。「④留学先の増加」については、選択肢を増やしてほしいとの意見があった。「⑤その他」については、英語の授業の強化を求める記載があった。

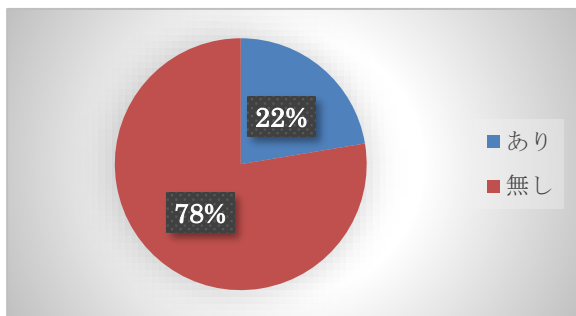


図19「海外渡航の有無」(設問17)

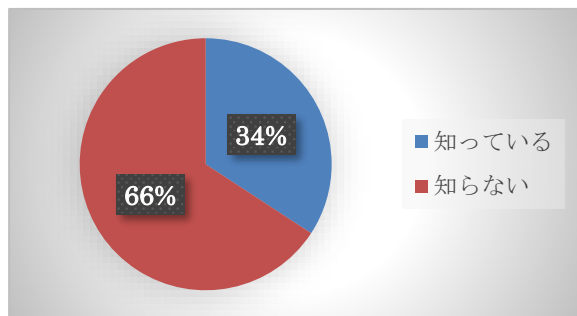


図20「北見工大の留学支援制度を知っているか」(設問18)

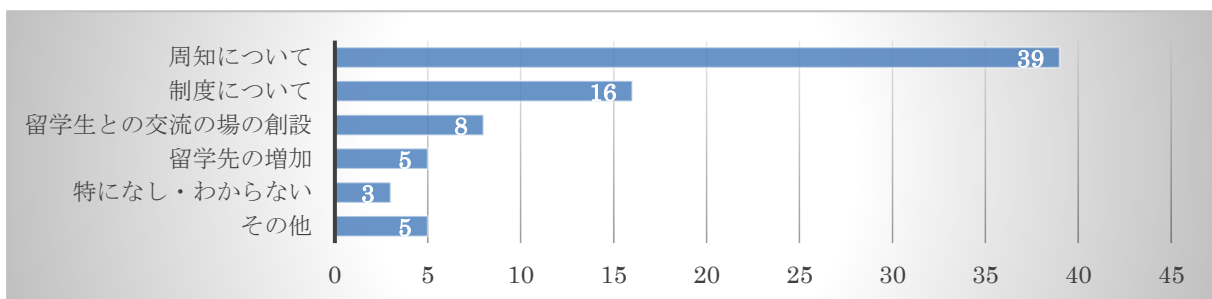


図21「北見工大の学生の海外留学を増やすには、どのような対策を講じればよいか」(設問19)

全結果を踏まえ、課題と対策をまとめたのが、表3である。授業に関して

は、後期授業から即対策を講じ、中国語の基礎力定着に向けた取り組みを実施した。それに加え、中国茶道や地域の紹介など、異文化を伝える取り組みも実施し、語学研修や留学により興味を持ってもらえるように意欲の醸成を図った。留学については、周知の仕方を工夫し、分かりやすく伝えられるようにチャートなどを作成し、国際交流センターのホームページなどに掲載をしていきたいと考えている。また、交流の場の創設は、これまでも国際交流センター行事として行ってきたが、より多くの参加者に来てもらえるような取り組みを行っていく必要がある。

表3 設問に対する結果と課題と対策について

設問	結果	課題と対策
設問1「大学入学前の中国語の学習経験について」	8割が学習歴なし	未学習者を意識した授業内容の設定
設問2「中国語を履修した最大の理由について」	単位取得	中国語学習の先にあるものを伝える
設問3「中国語の目指すべきレベルについて」	7割が簡単な日常会話	場面練習の強化
設問4「授業の難易度について」	7割が難しいと感じている	学習内容の再考
設問5「発音の正確さについて」	7割強が正確に発音できない	時間をかけた取り組み
設問6「今後の発音の取り組みについて」	8割が強化を希望	取り組みの強化
設問7「文法の理解度について」	問題ありが若干多い	時間をかけた取り組み
設問8「文法の理解度強化について」	9割が強化を希望	取り組みの強化
設問9「ハイブリッド授業について」	9割が満足	対面の選択肢の提供
設問10「授業に最も期待することについて」	会話、読解、4技能の向上	授業内容の再考とPDCA
設問11「学習前と学習後の興味の変化について」	半数が興味なしから興味ありに変化	興味ありの学生を継続して増やす取り組み
設問12「中国に対する印象について」	7割が良い印象	中国の現状について
設問13「安全保障上、中国に対する脅威について」	7割強が脅威を感じている	
設問14「中国留学・研修に参加したいか」	7割強が参加したくない	経験者の話を通じて魅力を向上させる
設問15「台湾留学・研修に参加したいか」	6割が参加したくない	参加者を増やす取り組み
設問16「中国語を話せる留学生と交流したいか」	8割が交流を希望	交流の場の創設
設問17「海外渡航の有無」	8割が渡航経験なし	海外に出させる対策の強化
設問18「北見工大の留学支援制度を知っているか」	6割が知らない	知名度不足
設問19「北見工大の学生の海外留学を増やすには、どのような対策を講じればよいか」	制度の知名度を上げる 体験談の共有 留学生との交流を増やす 海外の魅力を伝える取り組み	説明会等で制度についての周知と留学経験者の話を共有できる時間を設ける。同時に海外の魅力を伝える。既存の留学生との交流に加え、新たな交流の場を創設し、異文化理解の増進に努める。

出所：アンケートを元に筆者作成。

5 おわりに

本稿では、本学における第二外国語としての中国語を様々な方面から捉え、多角的に考察を行ってきた。それによると、学内では中国語圏からの留学生の受け入れに対し派遣学生が極端に少なかったことが明らかになった。また、第二外国語の履修については、表面上積極的に推奨しているものの、履修希望と実際の履修とでは大きな隔たりがあることも判明した。つまり、学生の学びたい気持ちに答えられていないということである。さらに、法人の経営統合により他大学の実情も調べたところ、第二外国語の選択肢が豊富で、且

つ本学にはない第二外国語も開講しており、今後三大学間での第二外国語に関する連携も模索する必要があると感じた。アンケート調査では、学習面の他、留学希望に関する項目も盛り込んだ。学習面では、7割の学生は単位取得が目的であり、目指すべきレベルについては、簡単な日常会話と回答している。実際に留学を希望しない学生が6割以上に上っており、そのことも目標値の設定に影響しているとうかがえる。本学の留学支援制度も入学時のオリエンテーションや随時質問を受け付ける体制は整えているものの、周知度が低く、今後指摘を受けた点を早期に改善し、対策を講じる必要性もある。そのことにより、少しでも留学に興味を持っている学生を第二外国語の学習を通して後押ししてきたいと考えている。

このように、各章ごとに現状を把握し、問題点を見出してきたが、今後は第二外国語の履修の意義を単に単位取得のみならず、留学や就職等でも使えるように指導を行っていきたいと考えている。そのことが、多言語化に対応できる人材育成につながるはずである。それには、指導内容はもとより、第二外国語を担当する教員自身が、学生の専門分野と融合できる教育の在り方を模索する必要も大いにあると指摘しておく。この点については、今後更なる検討が必要である。

参考文献

1. 論文

- (1) 三須祐介:「第二外国語としての中国語教育」, 広島経済大学研究論集, Vol.27 No.3, 広島経済大学経済学会, pp.55-66, 2004.
- (2) 大西博子:「第二外国語としての中国語教育のありかた」, 語学教育部ジャーナル第2号, 近畿大学語学教育部, pp.99-113, 2006.
- (3) 張軼欧:「第二外国語としての中国語の初級教育に於ける問題と対策」, 関西大学外国語教育フォーラム第6号, 関西大学外国語教育研究機構, pp.69-82, 2007.
- (4) 陳激:「第二外国語としての中国語教育について: その課題と方向性」, 東北公益文科大学総合研究論集第21号, 東北公益文科大学, pp.1-14, 2012.
- (5) 竹田宗継:「経済のグローバル化と第二外国語習得の意義について」, 同志社商学第65巻5号, 同志社大学商学会, pp.533-547, 2014.
- (6) 郭春貴・操智:「大学における初修外国語の1回目の授業について—初修中国語の例—」, 広島修道大学論集第58巻第2号, pp.199-208, 2018.
- (7) 片倉健博:「第二外国語としての中国語再履修クラスの授業展開について—初修外国語のリメディアル教育—」, 日本大学FD研究第7号, pp.1-12, 2019.

- (8) Chiang, S. Y.: "Cultural adaptation as a sense-making experience: international students in china", *Journal of International Migration and Integration*, 16(2), pp.397-413, 2015.
- (9) Jiani, M. A.: " Why and how international students choose mainland china as a higher education study abroad destination", *Higher Education*, Vol.74, No.4, pp. 563-579, 2016.
- (10) Lin, Yi & Worapinya Kingminghae: "Factors that influence stay intention of Thai international students following completion of degrees in China", *AsiaPacific Educ, Rev.*18, pp.13-22, 2017.
- (11) Tian, Mei & Genshu Lu.: "Intercultural learning, adaptation, and personal growth: a longitudinal investigation of international student experiences in china", *Frontiers of Education in China*,13(1), 2018.

2. インターネット

- (1) 独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）：「2020（令和 2）年度日本人学生留学状況調査」, 2022 年 8 月 31 日アクセス
- (2) 北海道国立大学機構：「北海道国立大学機構の経営方針」, 2022 年 4 月 10 日アクセス

3. 資料

- (1) 北見工業大学：『学生便覧 令和 2 年度』, 2020
- (2) 北見工業大学：『学生便覧 令和 3 年度』, 2021
- (3) 北見工業大学：「第二外国語と選択ICの履修について」, 2022.
- (4) 北見工業大学国際交流センター：「留学派遣と受入統計資料」, 2022
- (5) 鈴木衛：「中国語履修に関するアンケート」, 2022.